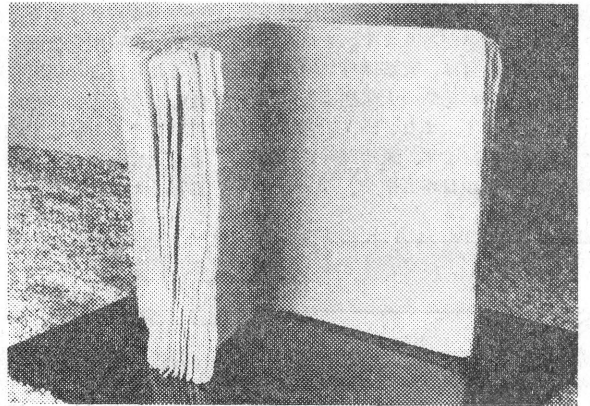


和紙たちのおしゃべり—角永和夫展



角永 和夫 「paper」

素材の集積と分散、あるいは固形の分解と再構成——この日常的な工作過程も、一人の造形作家の目や感性が加わることによって、芸術作品として蘇(そ)生する。材木を薄くスライスして注目を浴びてきた角永(かどなが) 和夫の仕事は、その典型と言えよう。その角永が、紙という初めての素材を使った発表を、名古屋の校画廊(第1の20、伏見ビル五階)で開催中だ。

作品は和紙を用いた十三点。無地の大きな和紙が何十枚、何百枚と重ねられ、一部がコンクリートのように固形化され、他は一枚ずつはがされているといった作品である。見ようによっては、昔の商家が用いた大福帳を思い起こさせるような雰囲気がある。どうやら作品は、濃(す)き、重ね、半乾燥し、一枚ずつはがして乾燥するという和紙製造の過程で、重ねて半乾燥した段階において一部を、

そのまま乾燥して固形化し、他を一枚ずつはがして乾かした仕事であった。三年前、この画廊で発表した材木をスライスした仕事とい、よくよく切斷したり、はがすことが得意な作家だ。

しかし、そして新しくもないこの素材や方法も、ひとたびこの作家の手をめぐると、特殊な美を発散する。積み重ねられた紙の半分が、押し固められたようになつて、他の半分が一枚ずつはがされて浮き上がっていたり、ほんの一部が固形化して、他が散り散りにめくれた作品など、素朴な紙の一面がにぎやかな語り口で、見るものに話しかけてくるようだ。さきの木の仕事といい、今回の仕事といい、素材の素性を単純明快に見届けた優れた発表といえる。作者の現代的な造形感覚と、周密な計算によって演出された仕事だ。十六日まで。

昭和57年(1982年) 10月5日(火曜日)

中部 富山 新聞

白い紙が詩的なムード

伝統の心を西洋的に再構築

東海のギャラリー

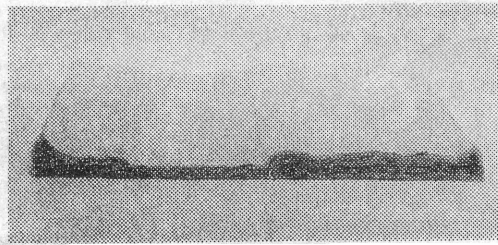
角永 和夫 展

校画廊

材木を薄く切つて、切片を再び積み重ねて復元したシリーズ「Wood」で知られる作家が、初めて紙を素材に選んだ。もともと、今回の個展の時期が、材木を切るのに適当でなかったからという理由なのだが、白い画廊空間に白い紙(和紙)という取り合わせは、照明効果による微妙な陰影が一種詩的なムードとなつて鮮烈である。

和紙をすいて乾燥しないうちに重ねて一部をプレスする。紙は二百枚から六百枚。プレスしない部分は接合しないように離して乾燥するから、本のページのようでもあり、断層のようでもあり、複雑な隆起のヒダとなつて現れてくる。

西洋の鉄の文化に対して、日本は木と紙の文化と言われ、自然との融和、共存が伝統的な形態だったわけだが、このころは鉄やプラスチックも大手を振っている。一九四六年生まれの作家は、その伝統的な心を、分析的な西洋の手法で解体し、再び構築しようとしている。欧米化どころか、西も東も一つになつてしまっている時代。そうでなければ立ち行かない時代。そんな時代を端的に表現しているを見た。



「paper」(一九八二年)

昭和57年10月10日(日曜日) 新 名古屋 新聞

素材は八尾和紙

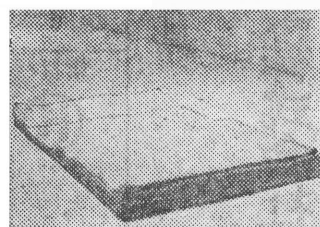
角永和夫個展

石川県鶴来町在住の角永和夫が、三年前に校画廊(中区錦一、伏見ビル五階)で個展を開いている(十六日まで)。

角永がこれまで取り組んできたのは「自然」のものを扱うということ。素材の持ち味を生かして作品化するのがその基本で、自然木を幾層にもスライスしたり、焦がすことを数年繰り返してきた。今回の展示でもこの素材主義は貫かれているが、対峙する素材自体が木から紙へと変わっている。タイトルは「paper」。

北陸・石川の隣県富山に古くから伝わる八尾和紙が今回の素材だ。紙スキまでの段階を本職の人にやってもらい、プロのようになった和紙の塊から角永の仕事となる。プロの角永の二百枚から六百枚の和紙の束を上から順にめくっていく。折り目をつけたものもあり、作品は全部で十三点。

めくる。折る。これ以外は何の手も施していない。後は天日にかざして自然に乾燥するのを気長に待つ。シンプルで芸術といふべきほどのものはないだろう。古代エジプト人は「パピルス」の茎から紙様のものを作り、それに絵や文字を書いた。一方、角永が作品の素材にした和紙の原料は「こうぞ」であるが、どこかしら古代の雰囲気を持ちあわせているように思える。



角永和夫 「paper」

のは、紙になるまでの段階がきわめて原始的だからだろうか。